

日本の公共放送が描くアメリカ・カナダの日系移民 —描かれ方の変遷を中心に—

横山 香奈

はじめに

- 1 研究方法
 - 2 データ分析方法
 - 3 分析結果
 - 3-1 1960年代の特徴・傾向
 - 3-2 1970年代の特徴・傾向
 - 3-3 1980年代の特徴・傾向
 - 3-4 1990年代の特徴・傾向
 - 3-5 2000年代の特徴・傾向
 - 3-6 2010年代の特徴・傾向
 - 3-7 「芸術」や「スポーツ」を通しての日系人の扱い
- おわりに

キーワード: アメリカ・カナダの日系移民、
公共放送、日系人の表象

はじめに

国を越えたヒトの移動は、国際化する今日において益々増加の一途をたどっている。かつて日本から海を越えてアメリカやカナダへ移民した日系移民は、時代の変遷とともにどのような主眼の置かれ方をしながら日本のメディアの中で表象されてきたのだろうか。

日系移民の表象については、文学作品、テレビドラマ、映画、演劇など数多くの媒体が存在する。日系人の表象分析に関しても様々な先行研究があり、1910年に発表された岡蘆丘の文学作品「並木」を分析対象とした日比（2006）の研究や、アメリカの公文書を基に19世紀末から日米戦争前後にかけての日本人・日系人及びア

ジア人・アジア系をめぐる移民史・市民権制度史について分析した村川（2011）の研究がある。また、近年の研究では、佃（2017）の、日本人の作り手が日本にいる日本人を主な読者や観衆として想定して制作した「日系人主題の大衆メディア」を取り上げて分析したものなどが挙げられる。しかし、公共放送を対象とした日系移民の表象を通時的に分析する研究は、管見の限り見当たらない。そのため、本研究では、多くの表象媒体が存在する中でも社会的影響力が大きい「テレビ」、その中でも「日本の公共放送」という媒体に焦点を絞り、その放送番組を通じての日系人表象の分析を試みる。そして、アメリカやカナダの日系移民がどのような視点から描かれてきたのかを通時的に検証することを目的とする。

テレビやラジオ番組という、放送時間の限られた一定の枠内に映像や音声をまとめようとした場合、製作者が強調したい側面がより際立って構成されることが想像できる。そこにはその時代時代における社会背景が投影されるとともに、視聴者に何らかの問題提起をしたり、意識変革を促すような何らかの意図があることも想定される。これらを念頭に置きながら、過去に放送された日本放送協会（以下、NHK）の番組を通時的に検証することで、これまでの日本の公共放送における日系移民の表象のされ方の変遷を明らかにしていくこととする。

まず最初に、本研究において、「日本の公共

放送」を分析対象とした理由について説明をしたい。メディアが過去から現在に至るまでに放送してきた番組を時系列として分析するには、多くの番組を纏まった形で入手する必要が出てくる。しかし、過去から現在に至るまでに放送された多くの番組を研究素材として取り寄せることは、DVD等で一般販売されていない限り、現実的には非常に困難である。そのような中、「NHK番組アーカイブス学術利用トライアル」という公募の研究制度を利用すれば、NHKの過去の放送番組に関しては、纏まった形で映像（研究に用いるにあたって、著作権の上でもNHKより使用許可が下りたもの）を入手できることが分かった。NHKでの放送番組と民放での放送番組での比較等ができれば、より深い分析ができるであろうことも想像はできたが、現実的には、民放で放送された番組を纏まった形で入手することは容易ではない。そのため、本研究においては、「NHK番組アーカイブス学術利用トライアル」を利用し、分析対象をNHKの放送番組に依拠することに決めた。

ただし、本制度を利用しNHKの過去の放送番組を入手するにあたっては、いくつか制限もあった。まずは、公募採択された課題の研究者一人当たりに許可された研究日程が指定されており、また、番組の閲覧は、NHK放送局の中にある専用の閲覧室でのみ許可されていた。外部に持ち出しての映像の閲覧は禁止されていたため、許可された日数の中で閲覧が物理的に完了できる分のみを研究対象として精査し抽出する必要があった。そのことを前提に、NHKのアーカイブに収容された日系人関連の番組を最初に検索してみた際、南米に移民した日系人関連の番組が一番多いように思えた。次に、多く収容されていたのが、アメリカやカナダの日系人関連の映像であった。上記の通り、許可された研究日程を考えると、アーカイブに収容されている全ての日系人関連の番組を閲覧すること

は物理的に不可能であった。そのため、これまでに本論文執筆者が興味を持って研究対象として取り上げてきた「アメリカやカナダの日系移民史関連」に絞って、今回、アーカイブ内から閲覧する番組を抽出することにした。ここでも、「南米に移民した日系人関連の番組」と、「アメリカやカナダに移民した日系人関連の番組」とを比較することができれば、研究により重厚感が増すであろうとの想像はあったが、本制度を利用させてもらう上での様々な制約もあることから、まずはアメリカやカナダの日系移民史関連に対象を絞って分析を進めることに決めた。

なお、日系移民研究の分野において、日系アメリカ人と日系カナダ人は、比較分析の対象とされることが非常に多い。先行研究には、飯野（1997）の「日系カナダ人の歴史」や、一瀬（1999）の「カナダの日系人―日系アメリカ人との比較において」、ヤング（2001）の「太平洋戦争における日系カナダ人と日系アメリカ人の処遇に関する比較研究」等、多数存在する。そのため、本研究でも両者を対象として分析を試みたいと思う。

1 研究方法

本研究では、上述の通り、「NHK番組アーカイブス学術利用トライアル」の2018年度第1回公募を通じて提供を受けた過去のNHK放送番組を閲覧し、日本の公共放送において、アメリカ・カナダの日系移民がどのような視点から描かれてきたのかを検証する。「NHK番組アーカイブス学術利用トライアル」は、2010年からスタートした公募採択型のプロジェクトで、NHKがこれまでに放送しアーカイブで保存している放送資産を、大学等の研究者が閲覧することで学術的に活用しようとするものである（NHKホームページ）。

アーカイブに保存されている放送資産は、NHKが組織的な保存を始めた1981年以降のものが中心である。まず、本研究で閲覧する番組については、NHKクロニクル内の「保存番組データベース」より、「日系」、「アメリカ」、「カナダ」、「移民」、「日系移民」、「ドラマ」等のキーワードを複合的に様々組み合わせることで繰り返し検索し、アーカイブ内に検索漏れがないか注意しながら絞り込みをおこなった。その際、許可された閲覧日の総日数も考慮し、割り当てられた研究期間内に閲覧できるであろう本数を想定し、絞り込みをした上で閲覧希望リストを作成した。そして、それらのリストを以て本プロジェクトの事務局へと申請をおこなった。しかし、希望した番組リスト内には、二次使用不可等の著作権の関係で閲覧の許可が下りないものもあり、それらを除いた番組が閲覧対象となった。

なお、アーカイブ内に映像は保存されていないものの中には放送されたアメリカやカナダの日系移民関連番組がないかを掌握するため、「放送番組表データベース」からも検索をおこなった。そこでも、「保存番組データベース」検索で使用した際と同様のキーワードを複合的に組み合わせることで検索をかけた。なお、「放送番組表データベース」の中には、ラジオ番組分は1925（大正14）年3月分からの番組表が、そしてテレビ番組分は1951（昭和26）年12月28日分からの番組表が保存されている。

つまり、本研究で対象としたのは、①閲覧が可能であった31番組（「保存番組データベース」から検索し、アーカイブに保存されていて閲覧も許可された分）と、②閲覧ができなかった77

番組（アーカイブに保存されてはいたが著作権や閲覧日数制限の関係で閲覧できなかった分や、保存はされていなかったものの、「放送番組表データベース」より、放送されたことが確認された分）の2種類である。②の閲覧ができなかった番組については、「放送番組表データベース」内にある「EPG番組記述」の情報も利用し、できる限り放送内容を把握するよう努めた。このようにしてリストアップした計108番組¹が本研究における分析対象となり、そのジャンルは、ドキュメンタリー、報道、ドラマ、そして教養ラジオに渡った。

なお、紙幅の都合上、閲覧した31番組の一覧表については割愛するが、NHK大阪放送局にて、2018年3月～5月の期間に閲覧をおこなった。それらの放送番組を分析することで、日本の公共放送の中で、アメリカやカナダの日系移民がどのような視点から描かれてきたのか、通時的にその特徴、傾向や変遷を検証していくこととする。

2 データ分析方法

データ分析手法については、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを採択した。木下（2007, 6）によると、データを一語、一文節、一行と細分化してその意味を検討する作業は、ショットガンを撃つようなもので、それでは当然解釈が拡散してしまう。そのため、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチでは、データを切片化することなく解釈し、そこから直接概念を生成していく。そして、切片化の方向での厳密さ重視ではなく、研究者の問題

¹ テレビドラマで、複数日に渡って放送されたものは、ひとつの番組としてカウントした。例えば、「あめりか物語」においては、「あめりか物語（1）」～「あめりか物語（4）」と4回に分けて放送されたため、NHKアーカイブ上では、「4つの別個の番組」として分類・

保存がなされているが、本研究においては、それら4つを「1番組」とカウントした。その他、「山河燃ゆ・総集編（1）～（3）」や「連続テレビ小説・さくら（1）～（156）」においても、同様のカウント方法を取った。

意識に忠実にデータをコンテキストで見ている、そこに反映されている人間の認識や行為、そしてそれに関わる要因などを検討していく方法である。

本研究においては、各番組をコンテキストとして視聴することを意識し、番組内容の根底となっているであろう概念やその概念を支持するような具体例をメモに取っていった。そして、描かれ方の「変遷」という流れを分析するため、放送日の若い順に並び替え、ある時期のかたまりごとに共通の番組構成傾向がないか検証をおこなった。分析期間の区切りとしては、時代の流れや特徴を見るのに充分かつ適当であろう「10年ごとのスパン」を、大まかな分析枠として設定することにした。

そして、今回、研究対象とした「アメリカもしくはカナダの日系移民」が日本の公共放送で最初に取り上げられたのが1964年に放送された番組であったため、まずは、分析のスタート地点の区切りを「1960年代の特徴・傾向」と設定した。以降、10年ごとに、「1970年代」、「1980年代」、「1990年代」、「2000年代」、「2010年代」と続けて分析の枠組みを設定した。分析対象となった計108番組の内容を精査の上、本論文においては、計108番組全ての番組内容を紙面に記載するのではなく、「各年代枠に特有の番組構成視点」や、「その年代に初めて現れた制作手法」等、その年代に際立って特徴的な傾向を中心に纏めていくこととする。なお、「芸術」や「スポーツ」に関する番組の中での日系人表象については、年代を問わず近似した番組構成が散見されたため、年代ごとに区切って分析する必要性は低いと判断した。そのため、「〇〇年代の特徴・傾向」といった年代を特定しない別枠として、『芸術』や『スポーツ』を通しての日系人の扱い」という分析枠を最後に設けた。

3 分析結果

本研究では、①閲覧許可の下りた31番組と、②閲覧はできなかったが放送されたことが確認された77番組、計108番組が分析対象となった。年代別に、アメリカもしくはカナダの日系移民が扱われた放送番組数の内訳をカウントすると、図1の通り、1960年代が3本、1970年代が8本、1980年代が14本、1990年代が25本、2000年代が17本、2010年代が41本という結果であった。

2000年代には、それまで上昇してきていた番組数がやや減少しており、それについて何か原因があるのかについては今回は特定ができなかったが、全体として見ると、「1960年代：3本」から「2010年代：41本」と、放送初期に比して現在では公共放送の中でアメリカやカナダの日系人が取り上げられる頻度が増してきていることが分かる。

3-1 1960年代の特徴・傾向

図1の通り、現存するNHKデータベースによると、1960年代に放送された「アメリカもしくはカナダの日系移民」に関する番組は3本のみであった。日本の公共放送で最初に取り上げられたのは、1964年1月7日、「日系米議員にきく一座談会」という番組内での日系アメリカ人であった。この番組は保存がなされておらず閲覧はできなかったが、「EPG番組記述」により、ダニエル井上（当時のアメリカ上院議員）やスパーク松永（当時のアメリカ下院議員）などの日系アメリカ人が取り上げられたことが分かる。白人がマジョリティであり社会のピラミッドの頂点に位置付けられていた当時のアメリカ社会の中で、日系人が白人中心に回っていた政治の世界に進出したことは画期的な出来事であり、そのことが日本の公共放送でも日系人を取り上げる最初の切り口となったのでは

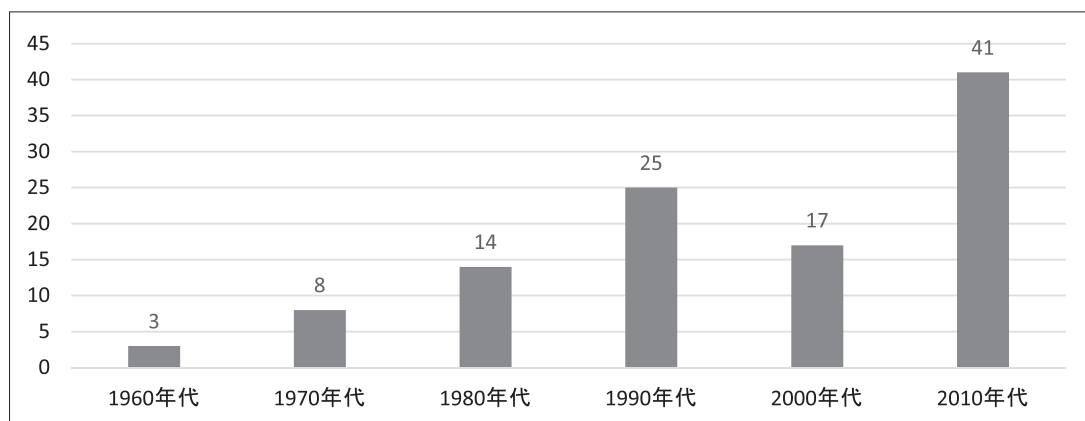


図1 アメリカ・カナダの日系移民が扱われた放送番組数の推移 単位：本

ないかと分析する。

次に、「日系米議員にきく一座談会―」（1964）とほぼ同時期に放送されたのが、「時の人『歌会始め』」に出席した日系カナダ人 中野武雄（1964）という番組である。中野武雄は、1964年に歌会始めにカナダより入選し、1985年秋に旭日章を受賞した人物である（トロント日本商工会ホームページ）。映像自体が保存されていなかったため、閲覧することはできなかったが、NHKの放送史の中で、初めて「日系カナダ人」が取り上げられたのが当番組であったことが分かる。

続いて、1960年代に放送された3本目の番組が、「NHK特派員報告『戦う日系アメリカ将兵』」（1966）であった。（映像はあるが）音声が残っていないとの理由で番組の閲覧許可が下りなかったことに加え、「EPG番組記述」にも番組内容が残されていなかったことから、どのようなメッセージ性を以て番組構成がされていたのかの詳細については不明である。

このように、1960年代に放送された番組はわずか3本のみであったことから、当時、アメリカやカナダに移民した日系人に対する関心は、日本国内において、さほど高くなかったことがうかがえる。

3-2 1970年代の特徴・傾向

1970年代に入ると、「特集ドキュメンタリーリトル・トーキョー」（1971）でも扱われている通り、日本人がアメリカに移住してからの100年余が大きな枠として捉えられ、アメリカ社会に根強い有色人種蔑視の問題が可視化してくる。当番組では、ロサンゼルスのリトル・トーキョーで病気に倒れた貧しい1世、そしてドラッグに溺れる3世を取り上げ、日系人を取り巻く負の問題が特にクローズアップされている。そして、アメリカに住む日系人が3世代目に入り、現地での日系人の歴史も長くなったことから、1世、2世、3世という世代別の切り口で生活の様子が描写されている。そして、「海外リポート 日本語テレビ放送―アメリカ―」（1974）で、約5万人の日本人と日系人のいるニューヨークと約12万人の日本人と日系人のいるロサンゼルスでの日本語テレビ放送の実情が紹介されていることから、移民先のアメリカにおいて「3世代」という多くの日系人が暮らしを受け継ぎ始めている現状がうかがえる。

そして、日系人強制収容の歴史が回想されるようになってくるのがこの年代である。「海外リポート 強制収容の記憶―アメリカの日系1世―」（1974）では、現在はアメリカの信用を

得て社会に溶け込んでいる日系人が、第2次世界大戦中はアメリカ政府によって強制的に収容されていた様子が、日系1世へのインタビュー映像を通じて伝えられている。

また、1970年代末には、テレビドラマとして初めて日系移民が題材にされた。1979年に放送された「あめりか物語」においても、世代ごとに日系人の葛藤が描かれており、1世、2世、3世という世代別の切り口は、テレビドラマの中でも同様であったことが分かる。「あめりか物語」では、写真結婚を経てアメリカへ渡った日本人女性の苦悩、白人から受ける差別や衝突、また第2次世界大戦中、生き延びるために2か国間で揺れ動く葛藤、そして時代は流れ、異人種間結婚に対する世代ごとの意識差、などがテーマとして描かれている。

3-3 1980年代の特徴・傾向

1980年代になると、日系人を「日系社会を大きく捉えた日系移民史」という題材の中で扱うよりむしろ、特定の日系人が「名前のある一個人」として、個別のヒストリーをより強調する形で番組に取り上げられる機会が増えてくる。「3万枚の証言 ある写真家の生きたアメリカ」(1980)では、宮武東洋という1人の写真家が取り上げられた。太平洋戦争中、アメリカ西海岸の全ての日系人が強制収容所に収容されたが、宮武はこの収容所生活を内部から記録した唯一のカメラマンとして知られている。彼が残した約3万枚の写真とそこに写っている人々の証言をもとに、戦争という最も悲劇的な時期を挟んだ半世紀のアメリカの歴史を描くドキュメンタリーの構成が取られた。その中で強制収容所の歴史も宮武の写真を通して紹介され、「祖国とは何か」を視聴者に問うメッセージが発信された。また、「日曜美術館 野田英夫 わがカリフォルニアそして東京」(1985)では、幼少時を日本で過ごし18歳で渡米した野田英夫が取

り上げられている。彼は美術学校を卒業し、アメリカ画壇でも名を知られるようになり、度々日本へ帰国し二科展に出品するなど将来を囑望されたが、30歳で亡くなっている。日・米両国の間に生きた人生の中で、野田が何を描こうとしたかを探る構成となっている。

また、1980年代には、日系人収容の「補償問題」に多く焦点が当てられるようになる。例えば、「ニュース解説 アメリカの誤りと良識—日系人強制収容への補償—」(1983)や、昭和58年度文化庁芸術祭優秀賞を受賞した「NHK特集 アメリカは謝罪すべきか—日系人強制収容命令の結末—」(1983)などが挙げられる。その中で、「私たちの歳月を返して」と嘆く老いた日系人の叫びに焦点が当てられている。

そして、442部隊を基軸とした日系2世の歴史が着目されるようになるのが1980年代である。「ドキュメント人間列島 高見山 故郷に帰る」(1984)の中では、20年の力士生活を終え大相撲ハワイ場所で最後の土俵をつとめ、生まれ故郷のハワイのファンに別れを告げるハワイ出身の高見山の個人史を辿りながら、彼に相撲を教えた日系2世や、彼の徴兵延期を州知事に働きかけた442部隊の2世たちについて、当事者らのインタビューを交えて紹介されており、番組の視点は「日系2世の歴史回想」が基軸となっている。

また、同時期、日系カナダ人についても取り上げられるようになる。日本の公共放送の中で、初めて日系カナダ人が取り上げられたのが、上述の「3-1 1960年代の特徴・傾向」内での記載の通り、「時の人『歌会始め』」に出席した日系カナダ人 中野武雄(1964)であったわけだが、1964年以来、約20年間ほど日系カナダ人は全く放送の中で扱われていなかった。随分と間を空け、ようやく2回目に日系カナダ人が取り上げられたのが、「NHK教養セミナー アジアの目・世界の目 いまルーツを求める旅

「日系カナダ移民の100年―」(1984)という番組であった。1964年の初出から20年間もの間、日系カナダ人は取り上げられていなかったわけだが、2回目ようやく日系カナダ人がNHKの番組内で登場したこの頃は、日系カナダ人の移民100年という大きな区切りを迎えた時代である。それをきっかけとして、(日系アメリカ人だけでなく)徐々に日系カナダ人にも主眼が置かれはじめたのではないかと推測する。

そして、テレビドラマはというと、1970年代末に初めてNHKの中で日系移民が題材として登場したわけだが、1984年には、その放送史の中で2番目の日系人題材ドラマとなる「山河燃ゆ」が放送される。これは、山崎豊子の「二つの祖国」が原作であり、アメリカと日本という2か国の祖国で揺れる日系人の葛藤が描かれたドラマである。

1985年代半ばになると、日系人がまた新たな切り口で描かれるようになる。「NHK特集 ザ・ハワイアン―海を渡った1世紀―」(1985)においては、過去の日系移民の困難に満ちた歴史回想だけではなく、「日本人と縁深い観光地」として南国ハワイが華やかに映し出され、ハワイアンソングを歌うタレント早見優の映像もまた、その象徴となっている。のちに「世界ふれあい街歩き 永遠の憧れリゾート!ハワイ島・ヒロ」(2012)などのハワイのリゾート紹介番組が放送されているが、そのような「リゾート地としてのハワイ」の描写構成は、1985年放送の上記番組が初出であった。

このような華やかな観光地ハワイとしての描写とは相反するように、1980年代後半にも、1970年代から引き続き、日系人の補償問題に焦点を当てた番組が継続して放送されている。例えば、「ある日系アメリカ人の半生―マイク正岡が語る偏見との闘い」(1989)などが挙げられる。そして、1980年代半ばに再度取り上げられ始めた「日系カナダ人」についてはと言う

と、「世界の人気テレビ番組―カナダ放送協会編―」(1989)でカナダ開拓民の歴史が回想されており、また、「おはようジャーナルちょっといい朝 44年目の補償―和歌山・日系カナダ人の戦後―」(1989)においては日系カナダ人の戦後補償問題が取り上げられている。

3-4 1990年代の特徴・傾向

1990年代に入ると、日系人補償問題に絡めて、「重い口を開き始める日系人」という切り口が新たに見られるようになる。また、日本が制作した番組だけでなく、アメリカが制作した日系人関連の番組もNHKで放送され始めているのが特徴となっている。

真珠湾攻撃の後、12万人を超す日系アメリカ人が強制的に収容され、このうち自ら志願して従軍した者も少なくない。しかし、日系アメリカ兵については、その記録自体があまりなく、それまで当事者から語られることもなかった。「ワールドTVスペシャル 苦い名誉―太平洋戦争の日系米兵」(1990)においては、太平洋戦線で日本軍と対峙してきた日系アメリカ兵がそれまであまり語ってこなかった、「通訳として捕虜の尋問、暗号解読、情報収集」などの任務が取り上げられ、戦後40年を過ぎてようやく日系アメリカ人に対する謝罪と経済補償がなされることに伴い、語りを拒んできた彼らの心のうちに焦点が当てられている。なお、この番組はアメリカのボックスプロダクションが制作した番組である。「沈黙を破る日系人」という視点は、その後、「沈黙の伝言―日系カナダ人強制収容所70年―」(2013)等の番組にも続いていく。

そして、1990年代は、(日本在住の日本人が日系人を描いた制作映像だけではなく)、アメリカ在住の日系人監督自身が日系人を描いたドキュメンタリー映画が脚光を浴びるきっかけができた年代でもある。日系3世のステイーブ

ン・オカザキ監督が描いた「収容所の長い日々 日系人と結婚した白人女性」(Days of Waiting: The Life & Art of Estelle Ishigo: アメリカのモージェットフィルム制作)は、1991年にアカデミー賞ドキュメンタリー部門で受賞をしており、日本では、1991年5月3日に番組放送された。この映画では、戦前日本人男性と結婚したため、太平洋戦争開戦後に強制収容所に夫と共に送られたアメリカ人の白人女性・エステルが残した手記と絵画を通し、当時の日系人の長く辛い悲劇の日々が描かれている。この映画公開に付随して、「ミッドナイトジャーナル 石川好のアメリカリポート2」(1991)では、作家の石川好がスティーブン・オカザキ監督にアメリカでインタビューをおこなった様子が放送された。

上述の「収容所の長い日々 日系人と結婚した白人女性」においては、強制収容所で残された「手記や絵画」を通しての描写がされていたが、「ミッドナイトジャーナル 太平洋戦争50年 日系人強制収容所 絵画が語る戦争」(1991)においても、強制収容所で描かれたキャンプシーンと呼ばれる「絵」を中心に戦争が描写されている。併せて、日系人画家ヘンリー・杉本の作品と彼が収容されたアーカンソー州のローワー収容所跡が紹介されており、個人の残した「文章」や「絵」を貴重な記録媒体としてリンクさせながら強制収容所の実態を伝えているのも、この時代の強制収容所関連番組の特徴であると言える。

また、「日曜スペシャル 日系人・20世紀の自画像—3つのドキュメンタリーから—」(1994)においては、北アメリカの日系人による3つのドキュメンタリー番組が収められている。日系人が自らの映像で自らを語り始めているのが特徴である。この番組は、①1920～30年代の日系人の暮らしを撮りためたホームムービー集である「ムービング・メモリーズ」、②大戦中に

日系人が受けた扱いとヨーロッパ戦線で日系人兵士が果たした功績を映画化した「ハワイからホロコーストへ」、そして、③カナダの大地で生きる日系人一家、オハマ家の3代にわたる苦闘を自伝的に描いた「最後の収穫」、という3作品が纏められたドキュメンタリー構成となっている。その3作品中のひとつである「ムービング・メモリーズ」では、日系人が日常生活の些細な様子をホームビデオで撮った映像が集められているが、当時はまだ日本でもビデオカメラを持っている人の少なかった時代である。そのような時代にアメリカに住む日系人にビデオカメラを所有する者が多かったのは、自分たちの成功の姿を日本に送って見せたかったからではないかと推測する。

そして、記録を残すにあたって、「ひとつの日系人一家に密着し、3代に渡る記録を家族単位で残す」という手法もこの頃現れ始めたもので、「最後の収穫」で扱われたオハマ家以外にも、「日曜スペシャル ヤスイ家3代のアメリカ」(1996)でのヤスイ家や、「ジイチャンが生きたアメリカ—日系人・尾崎家の100年—」(1999)でのオザキ家のケースが該当する。ヤスイ家の記録では、オレゴンを開拓した1世、2世が体験した日系人差別、そして今を生きる3世、といった世代ごとの描写がされている。日系人を世代ごとに描写するという手法は、これ以前の番組放送においても見られていたが、「ひとつの日系人一家に密着」というスタイルはこの頃に初めて見られるようになったものである。

そして、1990年代は、新たな日米関係を模索する動きも見られるようになる。「ミッドナイトジャーナル 真珠湾から50年10ドルにこめた日米のかけ橋」(1991)では、日本が国際社会にどのように関わっていくべきかという視点で番組が構成されている。駐在員や日系移民、留学生、旅行者、アメリカ進出企業(法人)など

在米日本人が「何何のために使ってほしい」という意見を添えて一率に10ドルをカンパする運動で、集まったお金がその意見に従ってそれぞれの関連機関に寄付される様子が紹介された。アメリカに住む（あるいは短期滞在する）日本人も、戦前からの日系移民に加え、駐在員、留学生、旅行者と多様になってきたことがこの運動の背景ではないかと考える。

また、「ミッドナイトジャーナル 市川猿之助の歌舞伎講座 日米交流の橋渡しを」（1992）においては、経済摩擦や貿易不均衡など微妙な日米関係の中にあって、相互理解の促進に地道な活動を続けている日系人に焦点が当てられている。そして、「日米摩擦を生きた男」（1992）においても、弁護士であるウィリアム田中の半生を通して描かれた「日米摩擦」が番組構成の中心となっている。このように、1990年代は、微妙な経済状況の中、「未来へ」と向かって新たな日米関係を模索する動きが描写されると同時に、「未来へ」と向かって今後どう日系人の経験を繋いでいくか、という点にも焦点が当てられるようになってきている。そして、「日曜スペシャル 何を語り継ぐか—全米日系人大会—」（1994）では、日系人2万人がロサンゼルスに集った「全米日系人大会」の様子が放送されている。この番組では、日米の狭間に生きた日系人の過去と現在がレポートされるとともに、戦後50年を記念して日系人が自分たちの経験を次世代へと伝えようとする様子が紹介され、番組の構成視点はここでも「未来へ」の展望となっている。

そして、1990年代には、英会話番組の中の教材の一部として、日系アメリカ人が登場するようになったのがまた新たな特徴であると言える。「英会話Ⅱ」（1993）では、アメリカ陸軍初の日系女性士官が取り上げられており、「英会話上級—インタビューを楽しむ—」（1995）では、ジャパニーズ・アメリカン博物館館長であ

るアイリーン・ヒラノが取り上げられている。また、「3か月トピック英会話 トップインタビューに学ぶ！自分を語る表現術 Lesson4 ステイブン・オカザキ」（2011）では、映画界の第一線で活躍している日系人監督のインタビュー映像が英会話教材として取り上げられている。

また、1990年代にも、継続して日系人を題材としたドラマが制作されている。これまでの日系人題材ドラマとの違いとしては、「終戦」がキーワードになっている点だ。「BSオリジナルドラマ エトロフ遙かなり」（1993）は、終戦の日になんだ特集番組として放送されたものである。内容は、真珠湾攻撃の機密情報をめぐって、アメリカ海軍諜報部の一員として日本に送り込まれた日系アメリカ人が展開するサスペンス歴史アクションで、アメリカや択捉島でロケがおこなわれた。これまでの日系人題材ドラマでは日系人の世代ごとの描写が主となっていたが、当ドラマにおいてはそのような描写は見られない。そして、日系人を題材としたドラマが複数国で共同制作されたのも、この年代が初めてのことである。「国際共同制作ドラマ『リンコ』」（1997）は、ヨシコ・ウチダの「The Best Bad Thing」を原作としたNHK（日本）、WQED（アメリカ）、シナール（カナダ）の3か国共同制作であり、1935年のカリフォルニアを舞台とした、日系人の12歳の少女リンコとハタおばさんの日常を描いた物語である。

3-5 2000年代の特徴・傾向

2000年代の番組では、アメリカで3世、4世の時代を迎えた日系人の、「日系アメリカ人」から「アジア系アメリカ人」という新たなアイデンティティへの変換が強く表象されるようになる。戦後60年の歴史を振り返りながら、自らのアイデンティティ、そして日本との距離を模索する日系人の様相が描かれ始めるようになって

たのがこの年代である。「連続テレビ小説・さくら」(2002)においては、ハワイ生まれの日系4世の主人公が、自分のルーツである日本を探するために英語指導助手として日本の中学校に赴任し、日本文化とのギャップを痛感しつつ成長していく様子が描かれている。

また、「日系アメリカ人の“日本”」(2008)では、日米関係の強化を模索する日本政府が、両国の“懸け橋”として期待している存在として日系アメリカ人が紹介されているが、戦後60年の歴史を振り返りながら、自らのアイデンティティ、そして日本との距離を模索する日系人の今に焦点が当てられている。日系人のアイデンティティ模索の背景には、次のような点がある。1900年代から1970年代まではアメリカのアジア系グループの中では日系が最大規模であったが、当該番組放送時の2008年時点で、日系は6番目の人口にまで減少している。日系3世以降、男性は6割以上、女性は8割以上が、日系以外のエスニックグループと結婚しており、「日系4世・5世以降は日系の割合が急速に薄くなり、日系人がどういうものであるのか分かりにくくなっている。むしろ“アジア系アメリカ人”と言う方がぴったりくるのではないか」とトム・イケダは語っている。そのようにして日系人の割合が減っていく中で、今後アメリカで生き抜くためには他のエスニックグループと連携していかなければ経済的にも難しいということが背景にある。番組では、アメリカの日系人社会での変化のきっかけのひとつとして、「アジア系アメリカ商工会議所協会」が設立されたことが紹介されている。そしてその調印式は韓国人街(日系ではない他のアジア系タウン)の一角でおこなわれた。つまり、この協会の設立は、日系コミュニティが他のアジア系団体と手を組み「アジア系アメリカ人」として経済界での影響力を強めていくことの意味表示にもなっているという。「日系アメリカ人」か

ら「アジア系アメリカ人」への変換という点に関しては、アメリカで生き抜くために単に経済的なメリットを求めて、ということだけではなく、そもそも、祖国から離れて4世代近になると本国に付随した強いアイデンティティ意識は自然と失われていくという側面もあろう。そのような中で、日本との距離を模索する日系人が増えてきており、それが番組構成にも反映されているのではないかと考えられる。

また、日系アメリカ人というアイデンティティが薄れる中、特に日系3世の間では自分のルーツ探しが流行ってきているという。実際、日系人向け新聞の羅府新報社が、個人のルーツを日本で調べて家系図を届けるというビジネスをおこなっているほどだ。「日系人はアメリカで十分な成功を収めたので、もっと視野を広げたいという新たな段階へ進んできているのではないか」と羅府新報社の社長で日系3世のマイケル・コマイは語っている。アイデンティティの模索、そして次の世代への継承という段階に来ていることがうかがえる。

日系人のアイデンティティ模索に関する語りについては、上述の「3-4 1990年代の特徴・傾向」の分析にある「ミッドナイトジャーナル 石川好のアメリカレポート2」(1991)での、石川からオカザキ監督へのインタビューの中でも見られる。オカザキ監督は、「日系2世は、120%のアメリカ人になれと言われた時代。アメリカ人にならないと困ると言われた状況であった。しかし、日系3世は、アメリカ人になるのは無理だと悟りだした世代」とも語っており、時代を経るごとに日系人のアイデンティティに変化と模索が繰り返されている様子が複数の番組から分かる。アメリカで3世、4世の時代を迎えた日系人が、「日系アメリカ人」から「アジア系アメリカ人」という新たなアイデンティティへの変換を模索し始めているという番組の視点に関しては、「日系人の英語での呼称

が「Japanese American」から「Nikkei American」に変わりつつある」というJane Yamashiroの指摘（Discover Nikkei, 2016年10月18日記事）とも重なり、そこからも日系人のアイデンティティ模索は、この時代に付随した確かな動きであったことが確認できる。

2000年代の番組構成においては、上記のアイデンティティ模索の視点以外は、これまでの年代のものと大きな違いは見られない。例えば、日系人の強制収容の記録については「ドキュメント地球時間」（2002）で描かれているが、2000年代以前にも強制収容の様子を記録する番組は存在していた。また、「ハイビジョン特集 チャップリンの秘書は日本人だった」（2007）では、世界の喜劇王チャップリンの秘書であった日系移民の高野虎市に焦点が当てられており、「知るを楽しむ 私のこだわり人物伝—愛しの悪役レスラーたち 昭和裏街道ブルース」（2008）では、第2次世界大戦直後のアメリカで名をはせた日系2世レスラー、グレート東郷に焦点が当てられているが、特定の日系人が「名前のある一個人」として、個別のストーリーがより強調された形で番組に取り上げられる手法は1980年代から既に存在している。さらに、日本が制作した番組だけでなく、アメリカのプロダクションが制作した日系人関連の番組がNHKで放送されるという点も1990年代から既に見られていた。例えば、2007年にアメリカの「T&Cピクチャーズ」、「シャドウキャッチャー・エンタテインメント」、「ロージャー・ブッシュズ・プロ」が制作し、2009年にNHKで放送された「衛星映画劇場アメリカンパスタタイム 俺たちの星条旗」（2009）は、第2次大戦中、強制収容所に収監された日系アメリカ人家族が野球を通じて誇り高く生きようとする姿を、実話に基づいて描いたヒューマンドラマである。また、「TOKKO—特攻」（2010）では、日系2世アメリカ人監督であるリサ・モリモトが、日

本の特攻隊の真実に迫ったドキュメンタリーであるが、日系人監督がメガホンを取ったという点でも、2000年代に初出のスタイルではない。

3-6 2010年代の特徴・傾向

時代が進み2010年代になると、「アメリカ同時テロ」と関連付けて日系人が扱われ始めるようになる。「渡辺謙 アメリカに行く“9.11テロ”に立ち向かった日系人」（前編・後編）（2011）では、「9.11テロ」と「太平洋戦争」という2つの歴史的イベントを併せて日系人を扱っている。テロ発生当時の運輸長官だった日系2世ノーマン・ミネタを紹介し、イスラム系アラブ系への差別が渦巻く中で、民主主義と正義を貫き、飛行機の乗客への人種差別的行為を拒否したミネタの行動を描くとともに、戦争中の日系人強制収容とも絡めて描写している。また、「ハイビジョン特集 アメリカ・家族のいる風景」（2011）においては、9.11テロから10年の歳月を経て、ワールドトレードセンターの設計者であった日系人が紹介され、日系人報道写真家タロー・ヤマサキが迫った、移民国家アメリカが生んだ様々な被害者の家族の今を描いている。

さらに、近年では著名な芸能人に焦点を当て、その個人の家族史を辿るという手法で日系人の歴史が描かれている。例えば、「ファミリーヒストリー—森山良子—日系2世の父 2つの祖国のはざまで—」（2016）や、「ファミリーヒストリー—AI—祖父は伝説の日系人部隊 イタリア人女性との恋—」（2017）が挙げられる。特定の日系人が「名前のある一個人」として、個人ストーリーがより強調された形で番組に取り上げられる手法は1980年代から存在していたが、著名な芸能人が取り上げられることで、視聴者の関心をこれまでも増して引き付けやすくなっていると思われる。

そして、それまで日系アメリカ人関連の番組では本土やハワイの日系人についてのみであっ

たが、2010年代、「アメリカ領グアム」の日系人が初めて取り上げられた。「BS特集 知られざるグアム―戦火の中の日系人たち―」（2011）では、太平洋戦争中、この島に暮らした日系人たちが、日本とアメリカという2つの国の間で翻弄され続けた苦難の歴史が証言でつづられている。

また、2010年代では報道番組内のワンコーナーとして、他の国内外の主要ニュースと並列に日系人が取り上げられることが増えてきている。例えば、「国際報道2014」（2014）では、アメリカ社会の中で日系人が果たす役割を模索するアイリーン・ヒラノ・イノウエへのインタビューが取り上げられている。そして「国際報道2016」（2016）では、ハワイの日系移民史や、日系3世宇宙飛行士エリソン・オニヅカへのインタビューをドキュメンタリー映画に残そうとしているアメリカ人監督が紹介されたり、人形を通じての日米親善秘話が紹介されたりしている。

そして、最近の報道番組での取り上げられ方の傾向としては、「トランプ大統領の移民政策」に絡めて、日系人の強制収容という苦難の歴史が回想される機会が増えていることが特徴的である。例えば、「NHKニュース おはよう日本」（2017）や、「国際報道2017」（2017）において、トランプ政権の発足から1か月を経て、「アメリカ社会に警鐘を鳴らす存在」として日系人が取り上げられており、「先人たちの底力 知恵泉（ちえいず） 勇気を出して声をあげよう―日系人フレッド・コレマツの戦い―」（2017）においては、トランプ大統領令を取り上げるとともに、第2次世界大戦期のアメリカにおける日系人強制収容の不当性を訴えるためにかつて声を上げたフレッド・コレマツの人生が再着目されている。また、アメリカだけでなく、カナダ社会においても、特定の民族に対する差別的な空気感が広がる中、「警鐘を鳴らす

存在」として日系カナダ人の歴史が取り上げられており、「キャッチ！世界のトップニュース カナダの日系人―知られざる歴史」（2017）内でもそのような描写が見られる。

3-7 「芸術」や「スポーツ」を通しての日系人の扱い

上記の通り、放送される番組の内容には年代によって特徴や一定の傾向が見られたが、「芸術」や「スポーツ」を通しての日系人の描かれ方については、年代における突出した特色は見られない。ただ、「芸術」や「スポーツ」の分野を通して制作された番組の多くに共通しているのは、「収容所の歴史」という視点である。

まず、「芸術」の分野から見ると、1980年に宮武東洋という写真家を取り上げられたのが最初であったが、その後、「日曜美術館 小圃千浦（オバタチウラ）とその仲間たち―日系人収容所の美術学校―」（1995）では、戦争中、アメリカの日系人収容施設の中で絵筆をとり、自分たちの文化を守り続けた小圃千浦が紹介されている。また、「新日曜美術館 イサム・ノグチの地球彫刻―札幌モエレ沼公園―」（1998）においては、没して10年となっていたアメリカの彫刻家・イサム・ノグチが紹介されている。

また、「BSシネマ ミリキタニの猫」（2011）では、日系人画家ジミー・ツトム・ミリキタニに焦点を当て、米国籍を持ちながら日米開戦時に日系人収容所へと送られたことや、アメリカ政府への反感から市民権を捨てて路上生活者となった彼の人生が描かれている。さらに、「The Art of GAMAN 強制収容所で生まれた“尊厳の芸術”」（2012）や「日曜美術館 GAMANの芸術 戦時下に刻まれた不屈の魂」（2012）では、太平洋戦争のさなか強制収容所に送られた12万余の日系人が作った日用品や装飾品などの作品が紹介されている。

そして、「スポーツ」の分野から見ると、「日系人野球の父―銭村健一郎」（1999）や、「サム

ライ野球団—北米・日系人の闘い」(2003)、「衛星映画劇場アメリカンパスタタイム 俺たちの星条旗」(2009)、「ろーかる直送便 金曜スペシャル夢と希望のダイヤモンド—ある日系人野球選手の話—」(2012)などの番組で日系人の強制収容所の歴史が扱われている。

おわりに

日本の公共放送においては、年代によって、時代背景や社会情勢を取り入れながら、日系人の取り上げられ方に一定の傾向があることが明らかとなった。それに比して、「芸術」や「スポーツ」を通して日系人が扱われる際には、時代ごとの突出した特色は見られないが、その多くに共通して、収容所の歴史とともに描かれていることが明らかとなった。ただし、本研究ではNHKの番組のみを研究対象としていることから、NHKと民放での番組における表象の比較や、また、日本国内だけではなく海外の放送局では日系人がどのように表象されているかの比較等については今後の課題としたい。

今回の研究分析結果から考察すると、特にドラマやドキュメンタリー、報道番組においては、世界の主要ニュースに応じて、今後も日系人の取り上げられ方や主眼の置かれ方が変化していくことが予想される。そして、異人種間結婚がさらに進むであろうアメリカやカナダの日系社会において、今後、「日系」という枠組み自体がメディアの中でどのように認知され、どのように表象されていくのかについても引き続き着目していきたいと思う。

引用文献

【書籍・論文】

日比嘉高「絡みあう「並木」—日本近代文学と日系アメリカ移民の日本語文学—」、『京都教育大学紀要』109、2006年、143-154頁
 一瀬昌夫「カナダの日系人—日系アメリカ人との比較において」、『帝塚山短期大学紀要』36、1999年、

32-43頁

飯野正子『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会、1997年、218頁

木下康仁「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法」、『富山大学看護学会誌』6-2、2007年、1-10頁

村川庸子「日系アメリカ人の表象—「リドレス史観」を超えるための試論」、『敬愛大学国際研究』24、2011年、25-46頁

佃陽子「日本の大衆メディアにおける日系人の表象」、『成城法学教養論集』27、2017年、69-85頁

ヤングB.M.「太平洋戦争における日系カナダ人と日系アメリカ人の処遇に関する比較研究」、『北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要』4、2001年、87-100頁

【映像】

NHK『日系米議員にきく一座談会—』、1964年1月7日
 ———『時の人 歌会始めに出席した日系カナダ人 中野武雄』、1964年1月11日
 ———『NHK特派員報告 戦う日系アメリカ将兵』、1966年8月2日
 ———『特集ドキュメンタリー リトル・トーキョー』、1971年11月2日
 ———『海外リポート 日本語テレビ放送—アメリカ—』、1974年3月17日
 ———『海外リポート 強制収容の記憶—アメリカの日系1世—』、1974年9月8日
 ———『あめりか物語 (1)』、1979年10月16日
 ———『あめりか物語 (2)』、1979年10月17日
 ———『あめりか物語 (3)』、1979年10月18日
 ———『あめりか物語 (4)』、1979年10月19日
 ———『3万枚の証言 ある写真家の生きたアメリカ』、1980年3月20日
 ———『ニュース解説 アメリカの誤りと良識—日系人強制収容への補償—』、1983年6月23日
 ———『NHK特集 アメリカは謝罪すべきか—日系人強制収容命令の結末—』、1983年8月8日
 ———『ドキュメント人間列島 高見山 故郷に帰る』、1984年6月13日
 ———『NHK教養セミナー アジアの目・世界の目 いまルーツを求め旅—日系カナダ移民の100年—』、1984年11月20日
 ———『山河燃ゆ・総集編 (1) マンザナールの風』、1984年12月28日
 ———『山河燃ゆ・総集編 (2) 戦場の兄弟』、1984年12月29日
 ———『山河燃ゆ・総集編 (3) 新たなる旅立ち』、1984年12月30日
 ———『NHK特集 ザ・ハワイアン—海を渡った1世紀

一]、1985年2月4日
 ——『日曜美術館 野田英夫 わがカリフォルニアそして東京』、1985年9月8日
 ——『ある日系アメリカ人の半生—マイク正岡が語る偏見との闘い』、1989年8月24日
 ——『世界の人気テレビ番組—カナダ放送協会編—』、1989年9月9日
 ——『おはようジャーナル ちょっといい朝 44年目の補償—和歌山・日系カナダ人の戦後—』、1989年9月22日
 ——『ワールドTVスペシャル 苦い名誉—太平洋戦争の日系米兵』、1990年1月16日
 ——『収容所の長い日々 日系人と結婚した白人女性』、1991年5月3日
 ——『ミッドナイトジャーナル 石川好のアメリカリポート2』、1991年8月23日
 ——『ミッドナイトジャーナル 太平洋戦争50年 日系人強制収容所 絵画が語る戦争』、1991年12月6日
 ——『ミッドナイトジャーナル 真珠湾から50年10ドルにこめた日米のかけ橋』、1991年12月12日
 ——『日米摩擦を生きた男』、1992年4月16日
 ——『ミッドナイトジャーナル ホットジャーナル (特集) 市川猿之助の歌舞伎講座 日米交流の橋渡しを』、1992年6月10日
 ——『BSオリジナルドラマ エトロフ遥かなり』、1993年8月8日
 ——『英会話Ⅱ』、1993年11月3日
 ——『日曜スペシャル 日系人・20世紀の自画像—3つのドキュメンタリーから—』、1994年8月7日
 ——『日曜スペシャル 何を語り継ぐか—全米日系人大会—』、1994年11月27日
 ——『英会話上級—インタビューを楽しむ—』、1995年8月30日
 ——『日曜美術館 小園千浦 (オバタチウラ) とその仲間たち—日系人収容所の美術学校—』、1995年9月10日
 ——『日曜スペシャル ヤスイ家3代のアメリカ』、1996年1月28日
 ——『国際共同制作ドラマ リンコ』、1997年5月5日
 ——『新日曜美術館 イサム・ノグチの地球彫刻—札幌モエレ沼公園—』、1998年8月2日
 ——『日系人野球の父—銭村健一郎』、1999年2月11日
 ——『ジイチャンが生きたアメリカ—日系人・尾崎家の100年—』、1999年8月11日
 ——『連続テレビ小説・さくら』、2002年4月1日～9月28日
 ——『ドキュメント地球時間』、2002年7月5日
 ——『サムライ野球団—北米・日系人の闘い』、2003年9月18日
 ——『ハイビジョン特集 チャップリンの秘書は日本人だった』、2007年12月25日

人だった』、2007年12月25日
 ——『知るを楽しむ 私のこだわり人物伝—愛しの悪役レスラーたち 昭和裏街道ブルース』、2008年7月1日
 ——『日系アメリカ人の“日本”』、2008年9月28日
 ——『衛星映画劇場 アメリカンパスタタイム 俺たちの星条旗』、2009年8月18日
 ——『TOKKO—特攻』、2010年5月19日
 ——『渡辺謙 アメリカに行く “9.11テロ”に立ち向かった日系人 前編』、2011年7月19日
 ——『渡辺謙 アメリカに行く “9.11テロ”に立ち向かった日系人 後編』、2011年7月20日
 ——『3か月トピック英会話 トップインタビューに学ぶ! 自分を語る表現術 Lesson4 スティーブン・オカザキ』、2011年7月20日
 ——『ハイビジョン特集 アメリカ・家族のいる風景』、2011年9月10日
 ——『BSシネマ ミリキタニの猫』、2011年10月18日
 ——『BS特集 知られざるグアム—戦火の中の日系人たち—』、2011年12月8日
 ——『ろーかる直送便 金曜スペシャル 夢と希望のダイヤモンド—ある日系人野球選手の物語—』、2012年3月8日
 ——『The Art of GAMAN 強制収容所で生まれた“尊厳の芸術”』、2012年11月10日
 ——『日曜美術館 GAMANの芸術 戦時下に刻まれた不屈の魂』、2012年11月18日
 ——『世界ふれあい街歩き 永遠の憧れリゾート! ハワイ島・ヒロ』、2012年12月18日
 ——『沈黙の伝言—日系カナダ人強制収容所70年—』、2013年1月8日
 ——『国際報道2014』、2014年6月3日
 ——『ファミリーヒストリー 森山良子—日系2世の父 2つの祖国のはざま—』、2016年2月5日
 ——『国際報道2016』、2016年3月4日
 ——『国際報道2016』、2016年6月7日
 ——『国際報道2017』、2017年2月20日
 ——『NHKニュース おはよう日本』、2017年2月20日
 ——『先人たちの底力 知恵泉 (ちえいず) 勇気を出して声をあげよう—日系人フレッド・コレマツの戦い—』、2017年4月25日
 ——『キャッチ! 世界のトップニュース カナダの日系人—知られざる歴史』、2017年12月5日
 ——『ファミリーヒストリー AI—祖父は伝説の日系人部隊 イタリア人女性との恋—』、2017年12月13日

【URL】

Discover Nikkei 『The Evolving Japanese American Identity』、2019年9月20日 アクセス
 <<http://www.discovernikkei.org/en/journal/2016/10/18/evolving-ja-identity-1>>

NHK番組アーカイブス学術利用トライアル、2018年9月
3日アクセス
<<https://www2.nhk.or.jp/archives/academic/index.html>>

NHKクロニクル、2018年9月3日アクセス
<<https://www.nhk.or.jp/archives/document/>>

トロント日本商工会、2019年9月23日アクセス
<http://www.torontoshokokai.org/trillium/201101/goaisatsu_0111.html>

謝辞

本論文は、2018年第1回「NHKアーカイブス学術利用
トライアル」の助成を受けておこなわれた調査研究
成果の一部である。NHK大阪放送局、ならびにNHK
エンタープライズの関係各位に厚く謝意を表す。